中国残留日本人・日系人と夜間中学

浅野慎一（神戸大学）

1. はじめに

中国残留日本人・日系人＝中国残留孤児・残留婦人、その配偶者、二世など。

「中国帰国者」？ BUT 中国定住者 & 日本帰国を果たせず、中国で亡くなった人も。

配偶者・二世の多く＝中国生まれ、中国国籍者。

適切な呼称なし。∴ 人数も不明（部分的推計のみ）。

課題：①夜間中学の生徒にも多数いる中国残留日本人・日系人は、どんな人生を歩んできた人々なのか？

②彼・彼女達にとって、夜間中学はどんな意味をもっているのか？

* 近畿全域の夜間中学の皆さん（18校・747名）に協力いただいたアンケート調査。多謝！

2. 中国残留日本人・日系人とは、どんな人生を歩んできた人々なのか？

【最初の棄民——侵略戦争とその破綻】

中国残留日本人の多く＝満州開拓移民・その子ども。

満州開拓移民：1936年、日本政府の七大国策・「満州農業移民百万戸計画」。

日本政府の宣伝・動員の下、特にソ連・中国の国境付近（現在の黒竜江省等）に多数入植。

日本の軍事戦略・植民地支配と密接に結びついた国策移民。

BUT 1945年8月、ソ連の「満州」進攻、日本敗戦→満州開拓移民：日本政府によって「満州」の地に遺棄。

青壮年男性：「根こそぎ動員」。ほぼ全員、徴兵。

→ ソ連軍進攻の最前線に取り残されたのは、女性・子ども（∴ 残留婦人・残留孤児）。

女性：子どもを背負い、広大な「満州」の地で数カ月間にわたる凄惨な逃避行。

ソ連軍の爆撃・襲撃、強姦。 & 食糧払底、餓死者続出。全滅、集団自殺も頻発。

現地日本軍による救援：皆無。「本土防衛」のためいち早く撤退。

日本軍・政府：ソ連軍進攻を想定。周到な撤退の計画・準備。

BUT その情報は極秘。開拓移民には避難命令も出さず。

∴ 開拓移民の避難→ソ連軍進攻を誘発。「静謐」確保の作戦。

開拓移民＝日本軍のスムーズな撤退作戦のための『生きた案山子』『生きた盾』。

難民收容所：零下30度以下。暖房・衣料・食糧が欠乏。餓死・凍死・病死が続出。

日本政府：難民の惨状を把握。BUT 非現実的な「現地土着・定住方針」。帰還事業に着手せず。

「将来の帝国の復興再建を考慮して、なるべく多くの日本人を、大陸の一角に残置」。

→日本人難民：零下30度以下で越冬。被害の飛躍的拡大。

満州開拓移民：27万人中、約3割・8万数千人が死去。

【戦後の中国社会における生活と就学——東西冷戦・グローバリゼーション】

日本人難民の一部：現地の中国人に養子・配偶者として引き取られ、命をつなぐ（＝残留孤児・残留婦人）。
中国人の養父母・配偶者の多く：愛情をもって養育、連れ添う。

BUT 貧しい農民・労働者。

& 中国：内戦（～1949年）、朝鮮戦争（1950～53年）、食糧難（1959～61年・餓死者2000～4500万人）。

→残留日本人：学校に通う経済的余裕なし。養父母・配偶者とともに労働。貧しい農村に学校なし。

一部に強制的な児童労働・虐待。「逃亡を警戒して、学校にも行かせてくれなかった」。

* 「養父母の双方とも死去し、手袋作りの内職で自活。学校を断念」

「家事や薪拾い、豚の放牧で時間をとられ、小学校をやめた」

「アヘン中毒の養父母の家で、子供の世話、洗濯、掃除、炊事。学校どころではない」

「当時の中国は自然災害で食物もなく、学校には通えなかった」

東西冷戦：政治的混乱（三反五反運動、反右闘争、「大躍進」等）→学校教育の混乱。

* 「大躍進時代、鉄鋼を作ろうという政治運動で中学は作業ばかり。退学して働いた」

不就学・非識字。7割弱＝中学を卒業せず（不就学・小学中退・小卒・中学中退）（図1・事例1参照）。

4割＝中国語読み書き・識字に不自由（「ほとんどできない」「日常にも困る」）（図2参照）。

貧困・飢餓・児童労働・政治的混乱・不就学・非識字：当時の中国の貧しい民衆・子どもたちの共通体験。

残留日本人の配偶者：5割以上＝中学を卒業せず（図1・事例2参照）。

2割以上＝中国語読み書き・識字に不自由（図2参照）。

* 「小学2年で中退。実は中退ともいえない。弟の付き添いとして聴講しただけ」

「自然災害で食物もなく、学校に行けない人はたくさんいた」

政治的混乱：文化大革命（1966～76年）＝学校の閉鎖、事実上の不就学の続発。

残留日本人の二世：1割以上＝中学を卒業せず（図1・事例2参照）。

約6割＝中卒以下。（同世代の日本人に比べ、極端な低学歴）

* 「父は政治的に批判されて入獄。病気の母（残留婦人）を看護するため小学2年で退学」

残留日本人・日系人：同世代の中国人にはない独自の重圧も。

「小日本鬼子」としていじめ→就学断念。進学・就職・結婚でも差別。

文化大革命→「日本のスパイ」として拘束・監禁、暴行、重労働。「自殺を考えた」。

* 「『小日本鬼子を殺せ。日本の獣の子を死ぬまで殴れ』といじめられ、学校を退学」

「母が日本人（残留婦人）だったので、文化大革命時代、学校に行けなかった」

* 戦後の東西冷戦（日中国交断絶）、中国の社会・政治的混乱。

残留日本人の一家＝「仮想敵国民」として迫害・差別。

1980年代末、東西冷戦終結→グローバリゼーション・「改革開放」（市場経済化）。

→貧富の差。大多数の民衆の生活：不安定化。

中国東北地方：重工業・国有企業の集積地。→倒産・リストラ、失業が激増。

医療費・教育費の高騰。「金がなければ、病院にも学校にも行けない」。

農村：一層深刻な貧困が蔓延。「中学を中退して出稼ぎへ」。

残留日本人の中国での人生：植民地支配→東西冷戦→グローバリゼーション。

国境を越えた地球規模の巨大な社会変動に翻弄。

日本政府による保護もないまま、懸命に生き抜いてきた。

配偶者・二世：そうした残留日本人と運命をともにしてきた家族。

【二度目の棄民——永住帰国の遅滞】

多くの残留日本人：戦後の早い時期から、日本への帰国を切望。

BUT 東西冷戦・1972年まで日中国交断絶→個人的帰国＝困難。

日本政府：調査・搜索なし。1958年、民間レベルの集団引揚げを中断。

1959年、戦時死亡宣告→残留孤児の戸籍抹消。調査・搜索を放棄。

1972年（日中国交回復）→残留日本人：厚生省・日本大使館等に肉親探し・帰国を求める手紙。

BUT 日本政府：ほとんど無視。

日本政府：世論に押され、残留孤児の訪日調査＝1981年以降。

& 参加資格を厳しく制限→何年間も待機→実父母・養父母等の関係者・証人は死去→肉親判明率3割以下。

日本政府：永住帰国にも数多くの障壁。

①「残留婦人（敗戦時13歳以上）」と「残留孤児（13歳未満）」を峻別。

残留婦人の帰国を特に厳しく制限。∴「13歳以上の中国残留＝自己選択・自己責任」。

②残留孤児も含め、永住帰国には肉親等による身元保証を義務づけ。

→ 肉親未判明、or 肉親が身元保証を拒否：帰国不可能。

「日本国民である私が帰国するのに、なぜ身元保証人が必要なのか？」。

③永住帰国の手続き：異常に遅滞。10年間以上にわたる放置も。

④20歳以上・既婚の子ども（2世）の同伴帰国を認めず。→2世・3世の日本来住：一層遅延。

日本政府による帰国制限：残留日本人・支援者の要求と運動→徐々に緩和。

BUT 帰国：大半が1980年代後半以降。（残留孤児：50歳前後、残留婦人：高齢、2世：中年）

永住帰国を果たせず、中国で死去した人。& 今も中国で帰国を切望し続けている人も。

【三度目の棄民——戦後の日本社会での生活】

残留日本人・日系人：帰国後も日本政府によって放置→苦難の生活。

①日本語教育＝不十分。日本語に不自由（図3～5参照）。孤立。日常生活不自由。選挙でも投票できず。

②就職支援＝ほぼ皆無。→多くが生活保護。

就職できても、不熟練労働・非正規雇用。解雇・リストラ・倒産等。

「月8万円で朝6時から夜11時まで、遅いときは深夜1時まで働かされ、とうとう倒れた」

「『アホ、ボケ、支那人は中国に帰れ』と罵倒され、殴られた」

「他人の仕事のミスの責任を押し付けられ、他の人が嫌がる仕事ばかりやらされた」

「60歳をすぎても12時間労働できつい重労働で、うち4時間はサービス残業。言葉ができないという理由で、給料は若い日本人の半分以下」。

③年金の納付期間の不足→老後：生活保護。60歳以上の生活保護受給率＝約9割（2004年）。

→a)生活水準＝最低限。& 言葉の壁→安売り・節約の情報も入手困難→一層貧困。

b)「能力に応じて勤労に励み、支出の節約を図る」義務。他に収入があれば、その金額分は返還。

→行政：他に収入がないか監視、他の収入を得るよう指導・督促。

「ちょっと出かけると、どこに行っていたのか、稼いできたのではないかと問い詰められる」、

「『とにかく生活保護から抜け出すために働け』と強制され、言葉もわからぬまま重労働につき、身体を壊した」

「別居している子供からいくら金をもらったのかと行政職員にいつも問い詰められるので、子供が家に寄りつきにくくなった。孫の面倒をみると、それは労働だから、子供から賃金をもらわなけ

ればならないと行政職員に叱られた」。

c) 養父母の介護・墓参等で中国を訪問→生活保護は支給停止。「贅沢な海外旅行」？。

「命の恩人である養父母に会いに行くと生活保護を止めるのは、あまりに非情だ」、

「養母が亡くなった時も帰れなかった。墓参にも行けないのはあまりにつらい」、

「86歳になる養母は、私がたまに帰ると大喜びする。私は養母のことが心配でたまらないが、中国に帰るたびに生活保護や病院代を止められて困っている」。

残留日本人・日系人：帰国後の日本で特別な存在として支援されず、自己責任での自立・適応を迫られ、それができなければ生活保護受給者の中に埋め込み。

帰国後の生活の困難：個人の能力・努力以前に、日本政府の政策によって大枠で規定。

早期帰国させず、帰国後も日本語教育・就職斡旋・年金整備等、必要な援護策をとらなかったこと。

【国家賠償訴訟——新たな支援策の限界】

2002年以降、全国16の地方裁判所で国家賠償訴訟。原告＝約2200人。日本政府に謝罪・賠償を求める。

敗訴が相次ぐ。BUT 「日本政府に厳密な意味での法律違反があったとまではいえない」。

(≠「日本政府に責任がなかった」、「日本政府が責任を十分に果たした」)

兵庫県の残留孤児：全国で唯一、勝訴(2006年12月)。

神戸地方裁判所：残留孤児の被害＝日本政府の法的義務違反に起因。国に賠償を命令。

世論・マスコミ：勝訴判決を高く評価、圧倒的に支持。

→法律改正(2007年)。新たな支援策(2008年)。

国民年金の満額支給、生活保護とは異なる新たな生活給付金制度が創設。

老後生活：やや安定。監視・干渉の緩和。

BUT 残留日本人の多く：不満。

① 残留日本人の被害を創り出した日本政府の責任を依然として認めず。謝罪・補償なし。

② ∴ 新たな支援給付金：国の責任をふまえ、すべての残留日本人に一律・平等に補償するものではない。

生活保護と同様、個々の残留日本人の収入認定→経済的に困窮する人だけを個別に救済。

→日本政府の責任を明確にし、人間としての尊厳を取り戻すため、新たな政治運動を模索。

【残留日本人・日系人は今——困難の継続と増幅】

① 残留日本人(1世)：高齢化。医療・介護の必要。ほぼ全員、病気・障害。

「病院で日本語で病状を説明できず、医者の説明もわからない」、「字が読めず、怖くて薬も飲めない」、

「言葉が通じないので通院が遅れ、手遅れに」。

日本語の壁→介護・福祉サービスの情報も届かず、

「言葉が通じないので、ホームヘルパーにも来てもらえず、老人ホームにも入れない」。

現行の生活給付金制度に収入認定→子どもと同居できず、家族介護に不安も。

② 孤立・孤独の深刻化。

中高年になってから来日→中国の親戚・若い頃の友人と日常的に交際できない。

来日後、日本語の壁+差別・偏見+行動範囲の狭さ→新たな友人を作れず。「孤独で寂しい」。

来日後、差別体験＝9割以上。

「アホ、バカ、中国人が日本で最初に覚えた言葉だった。生きるのがつらかった」、

「何か意見が違ふとすぐ『それなら日本にいらなくていい。中国に帰れ』と言われる」

中国では「日本人」として差別、日本では「中国人」として差別。

「別居している子どもも生活がきつく、必死で働いているから、遊びにも来られない」

孫（三世）：中国語を話せず。「孫達と話せないのはとても悲しい。孫に『おばあちゃんは日本人なのに、なぜ日本語ができないの？』と聞かれるたびに、私は心が苦しくなり、悔しくなり、泣きたくなる」

③子ども・孫（二世・三世）：貧困・苦難の世代的再生産。

二世：一世以上に帰国遅延・援護策欠如→就学・進学・就職で多くの不利。深刻な生活苦も。

2008年の世界同時不況→もともと不安定雇用が多かった二世の中で失業が急増。

現行の支援策：二世・三世＝ほぼ対象外。

* 「日本での生活は、次の詩の通り。『煮豆持作羹 漉鼓以為汁 萁在釜下燃 豆在釜中泣 本是同根生相煎何太急（豆を煮て、もって羹となし、鼓を漉して以て汁と為す。豆殻は釜下に在りて燃え、豆は釜の中に在りて泣く。もとは是れ根を同じく生じたるに 相煎ること何ぞはなはだしく急なるや）』（曹植）」

【残留日本人・日系人問題が提起すること】

①戦後の日本国民としての基本的な生活と権利の回復。

残留日本人＝戦争被害者・経済的困窮者であるばかりでなく、戦後の日本政府の政策によって、「戦後の日本人として生きる権利」を奪われ、放置され続けてきた日本国民。

戦後、大多数の日本国民：日本で義務教育、日本語習得、就職・年金加入、福祉、参政権行使。

戦後の日本人にとって当たり前の生活・権利から、残留日本人は長年、隔離。実質的に今も継続。

こうした日本国民の存在＝戦後日本の民主主義の根幹に関わる重大問題。

②民族・国籍の壁を越え、人間らしく生きることが出来る日本社会の構築。

中国語の方が得意。配偶者・二世＝中国国籍も多い。

中国・中国文化と密接な絆を保つ中でしか、人間らしい生活ができない日本国民。

配偶者・二世：日本・日本社会と密接な絆を保ち、日本社会で生きる定住外国人。

→同質的・画一的な「国民」を前提とした個人的・経済的な「救済」や「適応の促進」にとどまらず、

民族・国籍の壁を越え、多様性を尊重し、同じ人間として平等に尊厳をもって生きられる日本社会へ。

残留日本人・日系人が求める「平等」：

既存の日本の制度・社会に一方的に埋め込まれ、適応・同化、個人的自立を迫られることではない。

残留日本人・日系人の特殊性や、それを創り出した日本政府の責任を日本の政府・国民が認識し、残留日本人の生活と権利を守ることができる形に日本の制度・社会の側を変革すること。

①と②の理念＝夜間中学の現実そのもの？（今年の夏、夜間中学を初めて見学した時の印象）。

1)戦後の日本国民の基本的な権利（義務教育）の保障。

2)日本で暮らす外国人：多様性を尊重しつつ、民族・国籍の壁を越え、同じ人間として生きることをめざす教育。

3. 中国残留日本人・日系人にとって、夜間中学はどんな意味をもっているのか？

【夜間中学生になれない残留日本人・日系人——インタビュー調査（日本国内・150名）より】

①夜間中学生＝約1割。（図6参照）

2009年夏～夜間中学で集中的に調査→約1割まで上昇。

中学非卒業だが、夜間中学に通っていない人は膨大。夜間中学の潜在的需要の大きさ。

②夜間中学に通っている残留日本人・日系人＝「学ぶ意欲が強い人」＝その条件・基盤は？

a) 50歳未満、二世等。（図6・7参照）

b) 日本語能力（会話・読み書き）が高い。（図8～10参照）

c) 中国語の読み書き能力（識字能力）が高い。（図11参照）

* 中国語の読み書き能力、日本語能力が低い高齢者：夜間中学にあまり通えていない。

識字＋第二言語（日本語）＋中学の教科内容＝夜間中学も「敷居が高い」？

【夜間中学生の生活実態——アンケート調査より】

①a) 生まれた国・地域、b) 現在の国籍、c) 最も話しやすい言語：極めて多様。（図13～19参照）

→3要素すべてが「日本（日本語）」＝日系。（全体の28%）

いずれかが「韓国朝鮮」＝韓国朝鮮系（同35%）

「中国」＝中国系。（同26%）。中国残留日本人・日系人を多数含む。

韓国朝鮮系・日系＝60歳以上・女性・無職。

中国系＝60歳未満（約7割）、男性（約4割）、就労者（約4割）（非正規雇用）。

②言語環境（図19～20参照）

	最も話しやすい言語	日本語の読み書き	主な教育課題
日系	日本語	「問題なし」（6割以上） （「全く問題なし」「日常は困らない」）	基礎学力＋（一部、識字）
韓国朝鮮系	日本語（7割弱）	「問題あり」（過半数） （「殆どできない」「日常にも困る」）	識字＋基礎学力
中国系	中国語（日本語の壁）	「問題あり」（9割）	
		中国語の読み書き＝可 →	第二言語（日本語）＋基礎学力
		中国語の読み書き＝不可 →	識字＋第二言語＋基礎学力

口語と文語、日本語と外国語（中国語等）が交錯した複雑な言語環境：3～4通りの教育学習が同時進行。

③生活の歩み—「子どものころ、学校に行けなかった理由」（図27参照）

	経済的に苦しかった 仕事の手伝いなどで多忙	戦争のため	日本にいなかった
日系	○	○	
韓国朝鮮系	○	○	○
中国系	△	△	◎（日本政府の政策による帰国遅延）

戦争・貧困＝3タイプに共通する不就学の基本的背景。現在の生活にまで深刻な影響。

歴史・社会的視野の獲得：自らの人生の理解、自信・尊厳の回復にとって重要。

現在の生活二つながる苦難≠個人的責任・運の悪さ・自分だけの問題。

④現在の生活上の問題（図 28 参照）

	経済的に苦しい 将来の生活が不安	自分の健康	文字の読み書きが できない	日本語が通じない 孤独、友達が少ない
日本系	○	○（高齢）	△	
韓国朝鮮系	○	○（高齢）	○	
中国系	○（仕事が少ない）		△	○

* 「友達がなく、浮草のように根がなく、寂しい。日本語がわからず不自由な生活で、経済的にも苦しい。生活はすべて苦しい。いつも居候のように我慢しなければという気持ちで頭を離れない。差別されるのも悲しく、いつも中国のことを思っている」
「仕事はきつく、生活は苦しく、日本語もわからず、いじめられて押し潰されたような気持ちになる。何でも自分一人で困難を引き受けなければならず、とても疲れる」

⑤現在の社会関係（図 21・29 参照）

	夜間中学の情報源	通学圏	近隣・地域との関係
日本系	ポスター・チラシ、市の広報 （←識字）	広域的（←文字情報）	夜間中学を知らない／中学未卒業を知らせていない。
韓国朝鮮系	近隣の人 ＋夜間中学生徒（近隣）	地元・近隣 （対面、口語）	夜間中学通学者・中学未卒業が多数。 親密な人間関係・コミュニティ。
中国系	家族・親戚 ＋夜間中学生徒（中国語）	遠隔地から。 家（公営住宅）・職場・ 学校の3点移動 （中国語世界）。	近隣の間人間関係希薄。 中国語世界→中国文化習慣の維持。 国境を越えた中国語ネット空間。 リアルな地域社会での生活・社会 関係構築の課題。

【夜間中学が果たしている役割——アンケート調査より】

「夜間中学に通って、よかったこと」＝極めて多側面にわたる肯定的評価。（図 22～26・30～32、事例 3, 4 参照）

①基礎学力の養成。「読み書きができるようになった」「計算ができるようになった」「日本の社会について学べた」「いろいろな科目を学べた」「わからなくても安心してたずねられる」

韓国朝鮮系：在籍年数→「日本語の読み書き」能力の向上。「文字の読み書きができない」悩みの減少。

②新たな社会関係の構築。「いい先生と出会えた」「仲間・友達ができた」「自分と同じような立場の人々と出会えた」「自分とは違ういろんな人々と出会えた」

生活上の悩みの相談相手＝家族と並び、「夜間中学で知り合った友達」・「学校の先生」が圧倒的位置。

中国系：地域・近隣関係も希薄。「孤独、友達が少ない」→相談相手＝家族&夜間中学関係者に特化。

& 在籍年数→家族だけでなく夜間中学の友達・先生に相談。

③自信、自己尊重・主体的な生き方の獲得。「自分に自信がもてるようになった」「前向きに努力するようになった」「生きるために必要な知識が学べた」「いろいろなことをよく考えるようになった」

夜間中学の生徒の多く：人生経験が豊か。自らの個別具体的な経験に裏打ちされた生き方・経験知。

BUT 学校（理論知）：個別具体的な経験を、普遍的な視野・社会的文脈に位置づけ、柔軟に相対化。

自らの経験を客観化・対象化し、捉えなおすもの見方。

経験知と理論知を結合させる体験。（≠単なる中学卒の学歴取得・実用的知識の暗記）

- ④学ぶこと自体の喜び・「目的」としての学習。「毎日の生きがい・目標ができた」「勉強が楽しい」「勉強していると悩みを忘れられる」「学校の行事が楽しい」
 進学・就職のための「手段」としての勉強ではない。（「将来の進学・就職に役立つ」＝少ない）
 「目的」としての学び。「よりよく生きること・幸福（人間の本質的な目的）」のための学習。
 ＝私立中学受験・進学塾の生徒の「学ぶ意欲が強さ」との違い。
 × 進学の手段。限定された道具的・手段的な知識（how）、効率的・競争主義的に習得。
 ○ 「よりよく生きること・幸福」：正解のない目的（why）に向かう無限の叡知の中で自らの経験を捉え直す。
- 教師：× 「あらかじめ決まった『正解』・知識を上から押し付ける」。
 × 「生徒の人生経験・経験知を形式的に『尊重』。人格・人生観には不干涉」。
 ○ 「よりよく生きたい。自分を変えたい」という生徒の自己変革の要求に依拠→能動的・全人格的な働きかけ。

⑤中国系・韓国朝鮮系＝「日本語が学べた」

日本語の教育機関としての夜間中学＝高く評価。

日本政府：残留日本人・日系人に対する日本語教育＝貧弱。

ボランティアの日本語教室：時間・人材・施設・経費に限界。

中国系：在籍年数→日本語の読み書き能力＝急上昇。「日本語が通じない」悩み＝着実に減少。

* 「今、私達ができる日本語は、すべてこの夜間中学で学んだものだ」

「厚生省の帰国者定着センターでは 50 音も覚えられず、民間ボランティアの日本語教室もあまり勉強にならなかった。夜間中学で初めて、よく勉強できている」

もとより、a) 残留日本人・日系人の中で、夜間中学に通っている人はほんの一部。

b) 現在の夜間中学で習得できる日本語：中国系の日本での生活に十分ではない。

BUT 夜間中学＝現在の日本で最も充実した日本語教育機関。（高額・有料の日本語学校を除く）。

BUT 中国系も含め、「夜間中学に通って、よかったこと」＝「日本語が学べた」だけに特化せず。

それ以上に、①～④を幅広く多面的に評価。

夜間中学≠日本語学校。

技術的・道具的な日本語の習得というより、全人格的・多面的な教育・人間形成が生徒によって評価。

* 「夜間中学は、日本語を習っているだけでなく、心の中の苦しさを少し緩和できる場所だ。そして命を与える大切な場所だ。夜間中学がなくなれば、命がなくなるような気がする。私にとって夜間中学はとても重要な存在だ」

「この学校に来てから、私はいろんな面で変わった」

「先生達のおかげで自分に自信がもてるようになってきた。幸せになってくるような気がする」

特に多くの側面で夜間中学を高く評価＝韓国朝鮮系・日本系。中国系の評価：やや低い。

中国系：在籍 1～2 年目で評価低い。在籍 3 年以上→評価が好転。（韓国朝鮮系・日本系＝最初から高評価）

特に「多様な基礎学力の養成」、「新たな社会関係の構築」、「学ぶことそれ自体の喜び」。

最初は道具的・実用的な「日本語学習」を期待。

→その後、人格的・多面的な教育成果を実感・高く評価。

最も顕著な文化変容、多面的な人間発達（human development）の可塑性に満ちた主体。

（←比較的若い。来日後、日が浅い）

【夜間中学のさらなる発展に向けて】

「もっと、こうしてほしい」と思う点 (図 33・34 参照)

① 「夜間中学があることを、もっとたくさんの人に知らせてほしい」。

a) 孤立・悩みを緩和できるはずの多くの人々が、夜間中学の存在を知らされないまま放置。

b) もっと早く知っていたら、より早い時期から人生を変えられたのではないかと悔しさの表明。

② 「奨学金・就学援助金がほしい」。←経済的貧困層の多さ。給食制度を含む公的支援の必要。

③ 「希望すれば、もっと長く在学できるようにしてほしい」。

「人生の晩年になって、ようやくたどりついた学校。わずか3年で卒業はあまりに厳しい」。

高齢者の多さ。

中国系：日本語の壁。(相対的若年層：非正規雇用、仕事・子育て・介護→学業との両立は大変)

識字+第二言語(日本語)+基礎学力の同時習得。通常の義務教育年限での履修は不可能。

生徒の実情に応じた長期的・多様・柔軟な就業年数の設定が不可欠。

* 「毎朝5時に出勤、夕方5時から6時まで仕事。仕事はすごくきつく、ケガも日常茶飯事。

仕事が終わって駆けつけても学校に遅刻する。それでも私達は必ず学校に行き、絶対に学校を続ける決心をしている」

「中国でも不就学で漢字の読み書きができない。だから日本語の読み書きを学ぶのもスムーズに進まない。年だから記憶力も衰えている。普通の日本人の中学生なら3年間で学べても、私にはとても無理だ」

④ 中国系：「外国語のできる先生や職員を増やしてほしい」「日本語だけを特別に教えるクラスを作ってほしい」。

日本語教育のさらなる拡充・多言語対応＝ますます必要に。

BUT 現実的な生活問題の解決・社会構造の変革と結び付けて捉える必要。問題のすり替えに注意！

中国系(若年層)＝失業・劣悪な労働条件、子育て・介護、進学・就職等、多くの困難に直面。

日本語・言葉の壁＝困難を増幅させ、解決を難しくする一要因。

困難の原因そのものではない。相関関係と因果関係の区別が重要。

ex) 「日本語ができないから就職できない。だから日本語の勉強が必要だ」

BUT 「就職できないのは、言葉ができない人のせい？」「言葉ができない人は、就職できなくても当然？」

「言葉ができないと差別される。だから日本語の勉強が大切だ」

BUT 「差別されるのは、言葉ができない人のせい？」「言葉ができない人は、差別されても仕方ない？」

「日本語学習・習得＝すべての社会問題を解決する『魔法の鍵』とみなす認識

＝日本語ができない人の自己責任、差別を正当化する論理。問題のすり替え。

就職の困難、劣悪な労働条件、言語・国籍・性別・障害等を口実にした差別の原因

＝現実の社会構造(階級格差、国民国家の壁等)。

中高年・低学歴・人生の途中で来日した人：日本語が堪能でも安定した就職は困難。

& 人生の途中から来日した人：ネイティブ・スピーカーに比べれば、日本語は不十分。

∴ 「日本語習得・日本語教育で現実のいろんな社会問題を解決できる」＝非現実的。大きな限界。

日本語教育を重視する教師・学校だけでなく、中国系等の生徒・当事者も陥りがちな陥穽。

中国系・夜間中学生＝単なる「日本語学習（希望）者」ではなく、一人の「生きた人間」。
社会構造の矛盾を押し付けられた低所得層、低学歴者、途中来日のマイノリティ。
「日本語さえ学べば問題解決」といった個人主義・能力主義・競争主義的な上昇志向には限界。仲間との連帯・共同が必要。
日本社会への「適応」にとどまらず、日本社会を「変革」する必要。
日本語教育＝日本社会への単なる適応・同化の手段ではなく、
経済・社会的な問題の共同的解決＋変革の手段。

【日本の学校教育における夜間中学の意義と役割】

外国籍・異文化の生徒の多さ。中国残留日本人・日系人（中国系）＝その典型的存在。

1970年代頃までの日本：「日本定住者≒日本国民≒日本文化（日本語）の体得者」。＝「単一民族神話」。

在日韓国朝鮮人・華僑・アイヌ etc.：無視。「単一民族神話」に埋め込み。

* 移民・外国人労働者の新規受け入れなし。国内農村労働力の流動化・「島国単位の労働市場」で高度経済成長。（＝他の「先進」欧米諸国との違い）

戦後民主主義者・社会運動の担い手の多くも、「単一民族神話」を共有。

ex) 「国民春闘」「国民教育」「国民主権」。日本の学校教育：日本語で実施。

教育基本法：「教育の目的＝国民の育成」（第1条）。

BUT 現在、多元化・分節化。「日本定住者＝多様な国籍＝多様な文化（言語）の体得者」

「教育の目的＝（日本）国民の育成」のまま？ より普遍的・多目的な目的設定は不要？

→日本の学校・義務教育：根底的な揺らぎ。

→一般の中学をモデルとした夜間中学の改編＝時代に逆行。百害あって一利なし。

夜間中学の現実＝一般の義務教育を受けられなかった国民に対する補償（過去の清算）だけにとどまらず、
新たな時代の学校・義務教育の再構築に向けた模索の一つ。

& 外国で義務教育を修了した人に（本人の希望に応じて）、日本の義務教育の機会を保障する必要は？

中国残留日本人・日系人：中国で義務教育を修了、形式的には夜間中学に入学資格ない人も多数。

BUT 戦後日本政府の政策による帰国遅延→日本で義務教育を受ける機会を剥奪。

& 日本の義務教育を受けていない在日外国人＝多数。ますます増加。

諸外国（特に周辺諸国・農村等）での義務教育＝水準・質とも日本より劣る場合も。

社会科（歴史・地理・公民）・国語＝国によって観点・内容が大きく異なる。

ex) 日本国憲法（国民主権・基本的人権・平和主義）、日本国民の権利と義務、日本の議会制民主主義、
三権分立、地方自治、消費者の権利保護、企業の責任・労働組合、社会保障。

＝中学公民の教科書より。日本での社会生活に有用な基礎知識。諸外国では学べず。

「単一民族神話」時代との違い：人生の途中から日本に入国・定住する人々が増加

→外国で義務教育を修了していても、学ぶ意欲のある定住者には、一定の基準で補習コースを設置？

& 実質的な学習の必要：外国人だけでなく、日本国内で事実上、不登校→形式的な卒業者にも？。

現在、「単一民族神話」の崩壊→日本の学校・義務教育全体が巨大な歴史的転換の渦中。

夜間中学：その最先端に立つ。